

自ら学ぶ力を育てる授業の創造

II 公開授業(1)

- 1 中学校 保健体育科学習指導案 指導者 橋本直子
- 日 時 平成28年10月15日(土) 第2限(10:35~11:25)
- 場 所 体育館
- 学年・組 中学校1年 女子 32人(A組11人・B組10人・C組11人)
- 単 元 バレーボール
- 目 標
1. 自分がねらった方向にボールをコントロールするための身体操作を習得する。
 2. ボールの動きを予測し、ボールを持たない時の体の向きや構えの大切さに気づくことができる。
 3. ミニゲームを実施しながら、グループで協力し合って個人の課題やグループの課題を発見し、解決に向けて工夫することができる。
 4. 安全に留意しながら、準備や片づけ等が素早く協力してできるようになる。

指導計画 (全14時間)

- | | |
|-------------------------------|------------|
| (1) オリエンテーション | 1時間 |
| (2) 個人的技能の習得 | 2時間 |
| (3) 4コートバレーボール(1人制)のミニゲームを通して | 4時間(本時1/4) |
| (4) 4コートバレーボール(2人制)のミニゲームを通して | 3時間 |
| (5) 2コートバレーボール(5人制)のミニゲームを通して | 4時間 |

授業について

1895年にアメリカで考案されたバレーボールは、①誰でも気軽に楽しめる、②相手選手との身体接触が起こらない、③天候に左右されない、という3つの観点からバスケットボールとテニスを融合させたものだった。バスケットボール誕生から4年後に同じアメリカのYMCAで創られたニュースポーツであるバレーボールは、「するスポーツ」としての娯楽的要素が加えられたものの、やはりチームで得点を競い合う対抗意識の強い攻撃型スポーツとして発展していった歴史が見てとれる。

近年、オリンピックやワールドカップなど世界レベルの高度なゲーム展開をテレビ等で視聴する機会が増え、サーブやレシーブ、トス、スパイク、ブロック等、一流選手の個々の技能の高さに驚く。さらにIPが導入されるようになって試合間でも戦術が練り直されたり、多彩な攻撃パターンが繰り出されたりするようになっている。しかし、中学の生徒たちにとっては、これはあくまで「見るスポーツ」の楽しさであって自分たちが同じような技能を習得し、戦術を実践しよう等とは全く結びついてはいない。

本時の対象生徒たちはたいへん元気で明るく、個々の課題学習に対しては何度でも一生懸命挑戦しようとする素直さを持っている。しかし、勝敗が絡むゲーム形式の活動になると途端に動けなくなってしまう。この原因を授業者は、自分が狙ったところにボールをコントロールできないことに対する羞恥心が大変大きいこと、ボールの動きが予測できないために準備動作がとれないことの2点にあると考えている。

そこで今回のバレーボールでは、まず、生徒たちの失敗することへの不安や羞恥心を取り払う仕掛けを試みたい。本時の「4コートバレーボール」はボールの返球方向が3方向に増え、たとえボールが逸れてもそれを失敗ではなく戦術として自信をつけさせることにより、ボールを床に落とさないように積極的にボールに関わろうとする雰囲気づくりを大切にしたい。また、初期の段階ではバドミントンコートで4分割し、その中に入れるプレーヤーを1人ずつにすることでレシーバーを明確にする。しかし、レシーブした後のボールが一度で全て他コートに返球できるとは限らないので、それをサポートする仲間を2人ずつ配置する。このこと

でプレーヤーのボールに対する集中力が増すことを期待する。これらの活動を通して、ボールが飛んでくる方向を予測し、ボールを持たない時の体の向きや膝の使い方・構え方を学習させたい。また、サポーターに対してもレシーブした後のボールの動きを予測し、コートの配置を工夫させるように仕掛けていきたい。

今回の「4コートバレーボール」は生徒の実態や習得した技能レベルに応じてコートの大さやプレーヤー数を変化させることができる。基本となるルールは授業者が提案するが、生徒自身が自分たちのレベルに応じたルールを考案して独自のニュースポーツが誕生することを楽しみにしたい。

本時の指導目標

1. ボールを持たない時に、飛んでくるボールを予測して、体の方向や構えを整えることでき。
2. グループ内でプレーヤーの動きを観察し、課題の発見・サポーターの位置や戦略の修正を行いながら技能の習得と向上を図る。
3. グループで協力して、役割分担しながら安全に準備や片づけができる。

本時の評価規準（観点／方法）

1. ボールを持たない時に、次の動きを予測した体の向きや構えを整えることができる。
(運動の技能／活動観察)
2. グループで気づきや発見を共有し合い、課題解決のための工夫をすることができる。
(思考・判断／活動観察・ワークシート)

本時の学習指導過程

指導過程	学習活動	指導上の留意点
<導入> 出欠点呼 本時の説明 本時のグループ決定 準備運動	○来た人から4コートバレー用のコートづくり ○集合 ○本時の学習内容を把握し、課題を確認する 「4コートバレーボール」 ○カードをひいて「今日のグループ」をつくる ○準備運動 ・ボールコントロール、フットワーク	・来た人から協力してネットが設置できているか。 ・健康観察・見学生徒への指導 ・課題の確認ができているか。 ・速やかに新しいグループで交流しあえているか。 ・声掛け合って活動できているか。
<展開> グループごとに 分かれての活動 (作戦会議を含む) ゲーム 板書;ルールと対戦表 記録用紙・筆記用具	・課題解決のためのグループ活動 ○いろいろな方向や高さのボールをレシーブする練習 ○プレーヤー(1人)はコート内へサポーター(2人)はコート外の配置につく ○ゲーム終了毎に反省と作戦タイム 記録用紙にスコアを記入(1人)	・課題意識を持って積極的に取り組むことができているか。 ・課題に対してグループで工夫することができているか。 ・役割分担し、互いに協力して活動できているか。
<まとめ> 学習のまとめ 次時の課題の確認 片づけ	○本時の学習を振り返る ・グループの課題がどの程度解決されゲームに生かされたか。 ○次時の課題を確認する ○片付け	・気づきを共有できているか。 ・本時の目標を達成できたか。 ・次時のめあてをもつことができたか。

準備物 キッズ用ミカサスマイルボール バドミントン用支柱・ネット 得点板 ゼッケン(4色)

2 反省と課題

【授業者】小学校ではバレーボールという単元はないので中1で初めての「バレーボール」という単元になるが生徒たちにとって「見るスポーツ」としてのバレーボールは身近で、両手を組んだ状態でのいわゆるアンダーハンドパスの技術は1限目から現れている。個人技能の目標を「飛んでくるボールとの距離感をつかむ」「ボールへの恐怖心をなくして床にバウンドさせないようにボールを自分からとりに行く」「次のプレーがしやすいところにボールを上げる」と設定し、バレーボールとはこうあるべき、バレーボールのオーバーハンドパスやアンダーハンドパスはこうあるべきであるといった固定概念に縛られるのではなく、楽しみながら主体的にボールに関わろうとする学習環境の構築に努めた。個人技能の習得のためにボールをもたないときのからだの向きと構えを学習課題の一つとしているが相手のプレーの読みや予測に基づいたものに進化させていくことが課題である。

4コートバレーボールは「ニュースポーツを考えよう」というコンセプトのもと、生徒自身がいろいろなやり方やルール工夫や変化を生み出していけるようにアクティブ・ラーニングの仕掛けのひとつとして採用した。生徒の意見を取り入れながらコートサイズをバドミントンコートから6m×6mに拡大、やり方も1対1から1+サポーター対1+サポーターへ、さらに2対2へと変化していった。コートのサイズについては、現段階ではサーブ側優位の得点の動きとなっており、レシーブ側に優位になるルール改正をするにはどうしたらよいかを模索している。また、2時間おきに4人組の学習グループを編成してグループでの気づきや発見をより多くの仲間と共有できるように仕向けているが、発見の共有はあるものの課題解決の工夫までには至っていないことが課題である。

【参観者】オーバーハンドパス、アンダーハンドパスの習得はどの段階で求めるのかという質問に対して、授業者からは今回使用しているミカサスマイルボールは軽くて痛くなく、自分からボールを取りに行くことを容易にする反面、軽すぎて違う技術になるので今回はオーバーハンドパス、アンダーハンドパスの習得は求めておらず、通常のボールを使用する中2から求めていくという回答があった。

【参観者】「ボールとの距離感をつかむ」ために、ボールの落下点に入る＝投げられたフープの中に入るという学習活動の与え方とねらいに応じた教具、また「ボールへの恐怖心をなくす」ための教具について肯定的な評価をいただいた。

【参観者】床面ギリギリのボールをダイビングキャッチした生徒に対する褒め言葉によって他の生徒たちのモチベーションアップにつながっており、さらにどうしたらうまくいくのだろうかという気づきにつながる、発見を引き出す言葉かけの大切さが勉強になったとの評価をいただいた。

【参観者】中1でのバレーボールの学習課題は「ラリーを続けよう」から「ラリーを切ろう」に発展させるものになるのではないかと。ラリーが続くことをまず獲得させるためにはラリーポイント制での得点よりもサイドアウト制、できればレシーブ側が相手コートにボールを返すことで得点権が生じる、いくなれば逆サイドアウト制でのゲームを機能させる方がよいのではないかと指摘をいただいた。

【参観者】アクティブ・ラーニングは「指導者のねらいに基づく課題発見のさせ方」の工夫が重要で、生徒の発見や欲求をベースにしすぎると「ねらい」がぼけてしまうのではないかと。生徒たちが「得点」と「勝敗」を志向していくようになると「ねらい」にどう結び付けていくのか整理が必要なのではないかと指摘をいただいた。

3 授業風景



